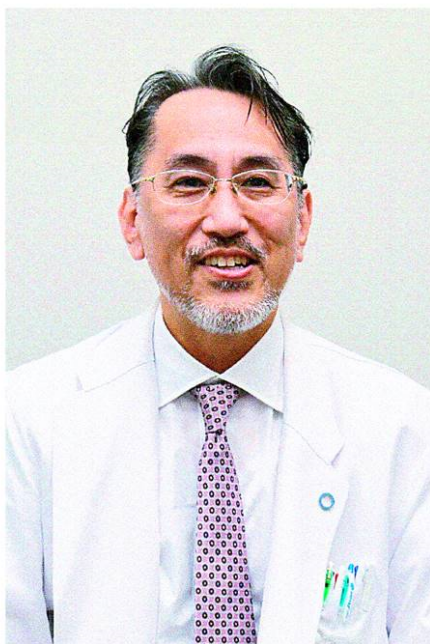


元気 甲州人



おかじま・ふみたかさん
甲府市出身。駿台甲府高—日本医科大学—日本医科大大学院修了。日本医科大千葉北総病院院長補佐。東京都文京区在住。52歳。

日本医科大千葉北総病院
糖尿病・内分泌代謝内科病院教授

岡島 史宜さん

ながら予防医学の研究を続け、「好きな研究ができるのは面白かった。忙しいながらもがむしゃらにやってきました」と話す。

研修医らへの医学教育にも力を注いできた。客観的な評価システムを用いて評価し、フィードバックして自身の成長につなげてもらう。心がけてきたのはできなかったことが、できるようになったとき、気づき、褒めること。若手の成長を見るのはやりがいでもあった。

ただ、管理職となって、診療の機会は減った。医師になってから現場を離れたことはなかった。「自分はあくまで医者」。山梨に戻るという選択は常に持っていたため、「パソコンも体力もある50代前半で、山梨に還元したい」と今秋に退職し、地元に戻ることを決めた。

甲府市内に開院するのは、糖尿病やホルモン、甲狀腺などを専門とするクリニック。専門的な医療の提供に加え、チーム医療を通じて、若手医師の経験

値の底上げにもつなげたい考えだ。クリニック内で患者への講習会も開いていく予定だ。冬の開業を控え、「山梨に貢献したい」。その思いは日に日に増している。(仲沢 篤志)

予防医学の知見 山梨に

糖尿病などの予防医学の研究を、診療とともに25年にわたり続けてきた。積み上げてきた経験と知見を山梨に還元するため、今冬、山梨へ戻り、専門のクリニックを開業する。高校1年になって初授

業の日の朝、母方の叔父が救急搬送され、突然死した。救急車の受け入れがうまくいかず、家族にとってもどかしい時間が続いた。理系だったこともあり、医学の道を志した。日本で初めて救命救急センターとして認可を受けた日本医科大へと進んだ。

研修医として救命救急を学んでいたとき、「人間は血管で死ぬ」と感

に進むこととした。最たる病である「いわば縁の下の力持ちとして仕事をしてきた」と振り返る。

2011年に付属の千葉北総病院に移った。当時、病院のある印西市には糖尿病の専門医がいなかった

も重なり、一番弟子となった。外来に、患者は一気にやってきた。同時に、病院内の横のつながりを生かし